

中村武羅夫

内藤鳴雪氏

内藤鳴雪氏

内藤鳴雪氏は俳壇の重鎮である。恐らく俳句の一つも読む人で、鳴雪氏の名を知らぬような者はあるまい。

余の鳴雪氏に面会したのは、春未だ早く薄寒い時であった。多分三月ごろの空の低く曇った底寒い日であったと記憶する。

住居は本郷の何やら町である。玄関に案内を乞うと、取次に出たのは女中で、来意を告げて、女中が取次ぎに入ろうとした恰度其時、手に巻紙と、硯箱とを持って、

二階から下りて来られたのは、鳴雪氏である。早速通されたのは、二階の客間で、襖一重隔てた、次ぎの室は書齋である。余と鳴雪氏とは、一間も放れて坐った。

鳴雪氏は見た所最う六十幾歳の老人である。髪は白髪交りで顔にも皺が寄った。口髯はないが、白髪交りの腮髯がシヨボシヨボと生えて居る。背の高い人で、手が長い。痩せてヒヨロヒヨロして居る。

老人ではあるし、腰も曲ったが、恐ろしく元気の好い人で、其声の高いのと、笑い声の妙なのとに少なからず驚かされた。キチンと坐って、両手を膝の上に置いてさ

すりながら、立て続け幕なしに喋られる。話を人に聞かして居るのだから、自分一人で喋って居るのだから、殆んど分らない。大抵の人が対談する時には、先ず句切り区切りには、相手の顔を覗いて、其返事か、或は頷くのを待って、次ぎを話し出すものである。然し鳴雪氏は、決して人の顔を見られない。相手には横顔を見せて、自分は壁を見たり、外を見たりなどして、相手の返事も待たず、句切りもなく其高い声に力を入れて喋り続けられる。滔々懸河の弁とは、如斯を云うのであろう。

至って呑み込みの早い人で、此方で未だ半分しか話さ

ない中に、其要領を早呑込みして了って、自分の意見を話し出される。極めて性急な人らしい。斯う云う人に限って、能く、奇談や逸話を製造するものである。

一見して、何だか枯れ木のような妙な人であるが、併し、接した感じが実に好い。仙人に会って居るような気がする。風采が第一、背がしがずぬけて高く、其割り合いに頭が小さくて、顔がしが顰んだようで妙である所へ持つて来て、其声と笑い声が如何にも奇抜なので、何となく人間離れのした人のような感じがする。

仙人——古い絵に見る仙人に正面に会った時には、屹

度生きた鳴雪氏に会った時のような感じがするに違いない。

客に対して別に愛想を言われるでもなければ、もてなし振りをされるでもないが、それでも何となく懐しいような気がする。人物に気取った所や、澄した所がない。客に面会するのも至って無雑作なもので、初対面でも、之れまで既に幾度も会ったことのある人間のようには、何の隔ても設けられない。

玄関を訪ねると直ぐ通して、些つと頭を下げ、直ぐ来意を聞いて、直ぐ話し出される。その性急なこと、目

の廻る程の忙しさである。然し、キビキビと片が付いて
気持ちが好い。話が済むと、余も直ぐお暇した。

至って気軽な、風変りの面白い人である。

日本文学電子図書館

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

日本文学電子図書館